14th Japan-Korea Symposium on Materials and Interfaces 報告書

シンポジウム取りまとめ　瀧健太郎(金沢大)
部会事務局　稲澤晋(東京農工大)

14th Japan-Korea Symposium on Materials and Interfaces （第 14 回日韓材料界面シンポジウム）が 2022 年 11 月 1 日（火）～3 日（木）の日程で、TKP ガーデンシティ PREMIUM 金沢駅西口(石川県金沢市)で行われた。本シンポジウムは，(i)化学工学を基盤として材料や界面に関する現象を研究している日韓の研究者が互いの研究成果について知見を深めること，(ii)さらなる研究の進展につながる人的交流を促進すること、を目的としている。化学工学会材料・界面部会と韓国化学工学会材料部会（Materials Division of KIChE）が共同で本シンポジウムを運用している。今回のシンポジウム実行委員長は、日本と韓国の当該部会長である山村方人教授(九州工業大学)と Chan-Hwa Chung 教授(Sungkyunkwan University)であった。

新型コロナウイルス感染症(Covid-19)の流行前は、例えば、2018 年は釜山(韓国主催)、2016 年は御殿場(日本主催)、でそれぞれシンポジウムを開催しており、2 年に 1 度の頻度で主催国を交代していた。しかし、2020 年から始まった新型コロナウイルス感染症の世界的な流行の影響で、2020 年に予定されていた金沢大会は開催延期を余儀なくされた。2021 年に日本開催の可能性を探ったものの、パンデミックが収まらず対面での交流が不可能であると判断したため、再度延期した。2022 年、Covid-19 が収束したわけではなかったが、世界各国で出入国制限が徐々に解禁されたことに合わせて、2022 年 6 月から金沢でのハイブリッド形式でのシンポジウム開催を計画し、冒頭の期日で 4 年ぶりの開催(日本開催は 6 年ぶり)にこぎ着けた。企画当初の 2022 年 6 月の時点では、日本への外国人入国者には全て訪日査証の申請が義務づけられており、韓国側からは Committee メンバーや招待講演者のみの 10 名程度の来日を想定していた。しかし、2022 年 10 月に訪日査証の原則廃止が決まったため、韓国側の参加者はコロナ以前のように査証なしでの訪日とシンポジウム参加が出来る様になった。その結果、韓国側からは 28 名(対面 26 名、オンライン 2 名)、日本側からは 40 名(対面 35 名、オンライン 5 名)の合計 68 名の参加があった。2018 年, 2016 年の参加者総数はそれぞれ 120 名程度であり、数値の上ではコロナ前には届かなかったが、マスク着用や密を避けるなど感染症対策の制約があるコロナ禍にもかかわらず、70 名近くの参加者あったことに、関係各位に心から御礼を申し上げる。

11 月 1 日は、シンポジウム会場の一角にケータリングで食事と飲み物を用意し Welcome Reception を行った(右写真)。一部の韓国側参加者は空港での長い入国審査の列に捕まったようで、当初の予定よりも到着が遅れたが、多くの参加者が来場し日韓の対面での交流が行われた。

11 月 2 日は主催者を代表して山村委員長と Chung 委員長による開会の挨拶に続き、日本側からは山口猛央教授(東京工業大学)、韓国側からは Sung Min Cho 教授（Sungkyunkwan University）がそれぞれ Keynote lecture を行った(右写真)。

Keynote Lecture に引き続き行われたポスターセッションは 34 件（日本側　22 件、韓国側　12 件、このうちオンラインポスターは 5 件）の申し込みがあった。密を避けるため、11 月 3 日の午前と午後の２回に分けてポスターセッションを行った。ポスター審査員による厳正な評価の結果、Byeongkyu Kim (Sungkyunkwan University), Aparna Chitra Sudheer (Tokyo Institute of Technology), Sunwoo Kim (Ewha Womans University), Ikumi Kato (Tohoku University)の 4 名がポスター賞に選出された。下の写真はポスターセッションの会場の様子である。

ポスターセッション後の 11 月 2 日午後と 11 月 3 日午前で日韓の両国から各 5 件の招待講演があった。材料・界面分野の研究者からホットな話題が提供された。今回も韓国側からは出口試行の研究が多い一方で、日本側からは基礎学理の解明に力点を置いた発表が多い印象を受けた。

シンポジウム Banquet は、11 月 2 日の夜に金沢市内の加賀料理店「大名茶屋」で行った。例年とは異なり、感染症対策が必要であったことから、バンケット参加者は事前登録制として、感染症対策がとられている外の店を利用した。日韓双方の委員長から挨拶やプレゼント交換を行った後、着席スタイルではあったが日韓双方の交流を深めた。

11 月 3 日午前の講演後、次回は韓国で二年後に再会する(おそらくソウル開催)ことを約束して学術プログラムは終了した。

今回のシンポジウムでは、Advisory Committee を山口猛央教授、塩井章久教授、庄野厚教授に、Program Committee を長尾大輔教授、脇原徹教授、長嶺信輔准教授、山本大吾准教授にそれぞれお願いした。コロナ前とは異なる運用が必要であったが、シンポジウムの運営に

貢献いただいた Committee メンバー各位には改めて御礼を申し上げたい。